# 梶井基次郎『のんきな患者』論

## ――身体と他者をめぐる物語――

谷　彰

### 一

梶井基次郎の遺作となった『のんきな患者』は、彼の処女作である『檸檬』に次いで梶井文学の中では論じられることの多い作品である。何故であろう。おそらく、それは、『のんきな患者』の作品としての魅力というより、作家論的な観点からの関心に拠るところが大きいのではないかと考えられる。もう少し詳しく言えば、梶井自らが「誰がどうあらうとも僕だけは完全にこの作品群（引用者註・梶井の生前に武蔵野書院から刊行された創作集『檸檬』のこと。「檸檬」から「交尾」までの作品十八篇を収録。）を踏み越したのです。僕はもう振向かない。」[1]とか、「僕はのんきな患者で　これまでの自分の文学からはちがつて来た、またちがつてゆくつもりを持つてゐる」[2]などと語っているように、『のんきな患者』とそれ以前の梶井文学との差異性をめぐっての作家論的な関心が、作品研究の焦点となってきたと言えるのである。最晩年の（といっても三十を少し過ぎた程度なのだが）梶井は、それ以前と異なるどのような文学観を抱くに至ったのかという問題点が捻出され、その検証作業が梶井の書簡などを中心に行われ、そしてそれが『のんきな患者』にどのような形で表現されているのかが、作品に即して実証される。従来の『のんきな患者』論のほとんどが大体以上のような手順を踏んだものとなっている。

ここでこうした作品研究の是非について言及するつもりはないが、少なくとも、作家論的な観点に立った作品へのアプローチが、作品の読みに対して一定の方向付けをすることだけは指摘できると思う。『のんきな患者』という作品内部における言葉と言葉との濃密な関係性よりも、あらかじめ作品の枠外で設定された問題意識によって、『のんきな患者』の中の言葉たちが再編成されていく。本論では、こうした特定の作家の専門的な研究者が陥りがちな作品読解の陥穽に対して充分に意識的であるべく、作家論的な問題意識をいったん括弧に括って、『のんきな患者』それ自体の作品構造・表現に即しての読みを展開していきたいと思う。しかし、それは作家論的な問題の放棄を意味しない。手順として、作品構造の解明の後に着手すべき問題だ、ということである。

## 二

『のんきな患者』の作品構造について述べた論がこれまでになかったわけではない。管見によると、岡本恵徳氏[3]・濱川勝彦氏[4]・樫原修氏[5]らがこの点について言及している。

岡本氏の指摘によると、『のんきな患者』という作品の構成は、第一章で主人公・吉田の意識が主として述べられ、第二章以降外部の人の生活の実体に話が焦点化されていき、第三章では「一生懸命な世の中」に対する共感にまで到達するという、個人から社会への拡大方向を軸とするもの、ということになる。そこに岡本氏は、梶井が書簡でしばしば触れる「プロレタリア大衆」への共感の反映を読み取っているのであるが、これは、あくまで作品外部の資料に過ぎない書簡に引き寄せ過ぎた作品解釈であると言えよう。岡本氏がこの作品の最終到達点と見なしている「一生懸命な世の中」への共感は、樫原氏も指摘[5]しているように、吉田の回想部分での感慨に過ぎず、作品の現在における吉田の最終認識と見なすには無理があるからである。

その樫原氏は、『のんきな患者』の時間構造に着目して、第三章で語られる結核をめぐる人々の諸相が吉田によって回想された過去の時点でのものだという、従来しばしば見落とされがちであった事実を指摘している。この着眼点は示唆に富むものだと言えるが、樫原氏が最終的に『のんきな患者』を、一個の自我を中心とした同心円的広がりを有し社会的視野を欠く私小説として捉えている点に、やや疑問を感じる。この問題は、単に作品構造の域に止まらず作品評価にまで関わって行くものであろうが、検討の余地のある問題だと思う。

最後に、濱川氏は、『のんきな患者』の作品構造を「説話論[6]」的方法の適用が見られるものだと規定している。濱川氏の指摘によると、『のんきな患者』の各章はほとんどが「或る日」とか「或る晩」で始まる挿話の積み重ねから成っており、それを図示すると以下のようになる。

〔第一章〕　猫の挿話

〔第二章〕
(一)　煙草を眺める挿話
(二)　鏡で真冬の庭を見る
(三)　母親との渡り鳥問答
(四)　末の弟の見舞
・吉田の身の上の説明
・以前住んでいた町の荒物屋の娘の死

〔第三章〕
(一)　人間の脳味噌の黒焼
(二)　首縊りの縄
(三)　仔鼠の黒焼
(四)　入信をすすめる女の挿話
肺結核で死んだ人間の百分率

これらの挿話は単に無作為に並べられたものではなく、「病にたいする人間の姿勢という最大公約数で一つの流れをなしている」と濱川氏は述べている。そのことに異論はないが、作品構造の解明という観点からすれば、各挿話の「最大公約数」を抽出するに止まらず、各挿話の作品内における機能であるとか各挿話相互の有機的な関連性などといった点にまで言及する必要を私は感じる。

以上の先行論の成果ならびに問題点を充分考慮に入れた上で、早

速、作品構造の分析に移りたいと思う。

## 三

吉田は肺が悪い。寒になつて少し寒い日が来たと思つたら、すぐその翌日から高い熱を出してひどい咳になつてしまつた。胸の臓器を全部押上げて出してしまはうとしてゐるかのやうな咳をする。四五日経つともうすつかり痩せてしまつた。咳もあまりしない。しかしこれは咳が癒つたのではなくて、咳をするための腹の筋肉がすつかり疲れ切つてしまつたからで、彼等が咳をするのを肯んじなくなつてしまつたからしい。それにもう一つは心臓がひどく弱つてしまつて、一度咳をしてそれを乱してしまふと、それを再び鎮めるまでに非常に苦しい目を見なければならない。つまり咳をしなくなつたといふのは、身体が衰弱してはじめてのときのやうな元気がなくなつてしまつたからで、それが証拠には今度はだんだん呼吸困難の度を増して浅薄な呼吸を数多くしなければならなくなつて来た。

『のんきな患者』の冒頭の一段である。先程も少し触れたが、『のんきな患者』の第一章には主として吉田の意識が語られているとの見解に立って、第一章からそれ以外の事柄を読み取ろうとしない読み手がいるようだが、ここに引用した冒頭部分を見る限り、『のんきな患者』は「吉田の意識」ではなくて「吉田の身体」についての叙述によって語り始められていることが分かる。

それにしても、この冒頭部分の語りは、ずいぶん微妙なものになっていると言える。「四五日経つともうすつかり痩せてしまつた。咳もあまりしない。」という表現からは、吉田の病勢を外側から冷徹に観察する医師のような眼差しを感じ取ることができる。だが、この眼差しは、吉田の身体を全くの対象（モノ）として扱っているというわけでもない。「胸の臓器を全部押上げて出してしまはうとしてゐるかのやうな咳」とか「腹の筋肉がすつかり疲れ切つてしまつた」、「心臓がひどく弱つてしまつて」などといった表現には、患者の側に立たなければ感得できない身体感覚が反映しているのである。つまり、この語りは、吉田の身体をよそよそしい観察対象として扱っているものの、モノとして見つめるほど突き放してもおらず、同様の身体感覚を共有し得る対象――他者のような対象――として扱っていると言うことができる。また、「腹の筋肉」に対して「彼等」という第三人称を用いていることからも分かるように、語り手は、病んだ吉田の身体を吉田とは別人格のように見なしてもいる。以上のことを総合すると、この冒頭部分の語りは、「病んだ身体の他者のようなよそよそしさ」を読み手に伝える機能を持っていると言えるだろう。

このように、冒頭部分を語りという叙述方法の観点から見れば、「病んだ身体の他者のようなよそよそしさ」を読み取ることができるのであるが、次に、その叙述内容に目を転ずると、どのようなことが言えるのか。一見して分かるように、ここには末期的ともいえる吉田の肺結核の病状が描かれている。樫原氏[5]はこのような吉田の病状に、「閉ざされた病室から一歩も動けないという」「主人公に課せられた限界」が表れていることを指摘しているが、確かに、『のんきな患者』の物語世界は吉田の病室内に限定されており、物語空間の枠組が冒頭部分においてすでに設定されていることをここに認めてよいと思う。

少々、冒頭部分にばかりこだわり過ぎているとの観がなくもないが、語りから見た「病んだ身体の他者のようなよそよそしさ」と叙述内容から見た「物語空間の枠設定」とが、これ以降の物語世界においてどう展開していくか、それを探ることが『のんきな患者』の作品構造を考察する上での一つの指標となる。

この冒頭部分に続く箇所で、物語は「吉田の意識」へと漸次移行していく。第一章における「吉田の意識」とは、呼吸困難に対する「どこから来るともしれない不安」をめぐってのものである。この「どこから来るともしれない不安」とか「えたいの知れない不安」などの表現から、『檸檬』の冒頭の「えたいの知れない不吉な塊」という著名な表現を連想する読者もあるいはいるかも知れない。しかし、『檸檬』の「不吉な塊」が、「結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼くやうな借金などがいけないのではない。」などというように、主人公の日常性を作品の前面から極力排除することによって時代の病を象徴し得る普遍性を獲得していたのに対して、『のんきな患者』の「不安」は、吉田の現実に密着した吉田個人の不安であって、打てば響くように読み手に伝わる性質のものとは言いがたい。語り手は、まず、そうした吉田の意識に接近して、吉田の「不安の原因」を探ろうとしている。

吉田はこれまで一度もそんな経験をしたことがなかつたので、そんなときは第一にその不安の原因に思ひ悩むのだつた。一体ひどく心臓でも弱つて来たんだらうか、それともこんな病気にはあり勝ちな、不安ほどにはないなにかの現象なんだらうか、それとも自分の過敏になつた神経がなにかの苦痛をさういふ風に感じさせるんだらうか。

ここに描かれているのは、逡巡する吉田の自意識である。だが、このような形で「不安の原因」を追求して行くことがどのような結果に終わるのかは、ある程度想像することができる。

――しかしそんなことはいくら考へても決定的な知識のない吉田にはその解決がつくはずはなかつた。その原因を臆測するにもまたその正否を判断するにも結局当の自分の不安の感じに由る外はないのだとすると、結局それは何をやつてゐるのか訳のわからないことになるのは当然のことなのだつたが、しかしそんな状態にゐる吉田にはそんな諦めがつくはずはなく、いくらでもそれは苦痛を増して行くことになるのだつた。

濱川氏[4]をはじめとしてすでに多くの論者の指摘があるが、「決定的な知識のない吉田にはその解釈がつくはずはなかつた」とか「そんな状態にゐる吉田にはそんな諦めがつくはずはなく」などの表現から、語り手が、自己の意識にのみ拘泥する吉田を突き放していることを見て取ることができる。

この二つの引用箇所において語り手は、まず、読み手を吉田の自意識の世界に誘い込み、連綿と続く自意識の逡巡に長々と付き合わせたあげく、吉田の「不安の原因」そのものについてはなんらはっきりした情報を示さずに、吉田のみならず読み手をも、「訳のわからないことになるのは当然のこと」だと突き放すのである。この語りが読み手に伝えようとしているものは、吉田の「不安の原因」そのものではなく、それを自意識の逡巡によって追求することの不毛性だと考えられる。

ただ、こうした吉田の意識を相対化する機能をもった語りは、これ以降『のんきな患者』から窺うことはできない。以下に展開され

る語りは、ほとんど吉田の意識に寄り添ったものとなっている。

（『のんきな患者』の方法的な問題点を批判するとしたら、この語りの不徹底さを揚げるべきだろうと思うが、このことは後述に委ねることにする。）したがって、これ以降は語りよりも語られる内容に作品分析のポイントを置くことになるだろう。

ともあれ、不毛な「不安の原因」詮索の次に、吉田は「不安の手段」について思いを巡らせているが、「それは人に医者へ行つて貰ふことと誰かに寝ずの番についてゐて貰ふことだ」という、他者との関係における苦痛として表れている。吉田はここで人に遠慮をしているわけだが、それは自己と他者との間の心理的な距離を意識しているからにほかならない。最も身近な存在であるはずの母親に対してですら、「今のこの自分の状態をどうしてわかりの悪い母親にわからしていいか」と思い悩むほど、ここでの吉田の他者から隔てられているという意識は強い。それと同時に、吉田は、「このえたいの知れない不安の内容が実現するやうなことがあれば最早自分はどうすることも出来ない」と、いつ呼吸困難に陥るか分からない身体の状態にも甚だしい不安を感じている。つまり、「病んだ身体」は本人の意志ではどうにもならないという意味において、ひとつの他者存在として吉田を脅かしていると言えるのである。こうしてみると、『のんきな患者』の冒頭の語りが表していた「病んだ身体の他者のようなよそよそしさ」は、このような吉田の意識を導き出すためのものであったとも考えられる。

以上のことを総合すると、吉田の「不安の手段」とは、母親に代表される文字通りの他者と、病んだ身体という比喩的な意味での他者との、二重の他者性によるものだと言えよう。濱川氏が「猫の挿話」と呼ぶ一連のエピソードも、自己の意のままにならぬ他者に対する吉田の不安と脅威という文脈で解釈できると思われる。（この挿話において猫が、「訳のわからない猫」・「懲罰といふこと以外に何もしらない動物」・「訳のわからないその相手」というように、意思の疎通の不可能性を強調して表現されていることも、そのことの一証左となろう。）第一章の作品全体における機能は、このように、自己の意識に囚われるあまり他者との間に意思の疎通を行い得ず、身体ならびに他者を「不安の手段」としか見なしていない吉田の姿を、読者に印象付けるものだと言うことができる。

## 四

続いて第二章に目を転じよう。第一章同様、その冒頭の一段落に注目してみると、吉田の病状が小康状態になって、彼が苦しかった二週間を「思想もなにもないただ荒々しい岩石の重畳する風景だつた」と客観視するだけのゆとりを取り戻した様が描かれている。その苦しかった二週間、吉田は「身体を鯱硬張らして」いつ訪れるとも知れない呼吸困難に身構えていたのであった。市川浩氏[7]によれば、このような身構えは「内転と屈曲」と呼ばれるもので、世界や他者と鋭く対立する姿勢だということなのであるが、病状の小康を得た吉田は、必然的にこのような姿勢から解放され、世界や他者に向かって心を開いて行く。しかもそれは、「なにかの快楽を求めるやうな気持」とあるように、身体的なレベルでの生の充足感にも通じる行為だと言える。

この後に続く一連の挿話――濱川氏の言うところの、（一）煙草を眺める挿話・（二）鏡で真冬の庭を見る話・（三）渡り鳥問答――

も、この冒頭部分からの流れの中で解釈できるものである。それぞれの挿話の内容と作品内における機能について、以下に簡単にまとめてみよう。

まず第一に、煙草を眺める挿話であるが、これは、母親の忘れていった刻煙草の袋と煙管を吉田がただ眺めるだけで、「寝られない春の夜のやうな心のときめきを感じ」るという話である。この場合、吉田がその煙草を吸うということはもちろん、それが手に届く所に行くことでさえその実行の可能性は絶たれており、吉田もそのことを充分自覚している。ただ眺めるという行為にもエロス（生の充足）を感じられるというこの話は、病室から一歩も出られないという限界状況の中にいる者が、いかにして生きる希望を失わずにいるかという問いに対する、ひとつの答えでもあるだろう。

次に、鏡で真冬の庭を見る挿話についてだが、これは、吉田が人づてに世間の人々の話を聞くことの暗喩として解釈することができる。特に、「鏡で反射させた風景へ望遠鏡を持つて行つて、望遠鏡の効果があるものかどうかといふこと」を確認するといった児戯に等しい行為からは、ある種の諧謔味とともに、限界状況の中にありながら懸命に外界との通路を失うまいとしている吉田の姿が髣髴とするのである。

第三の渡り鳥問答は、『のんきな患者』の中でも最もユーモラスな箇所として多くの論者に取り上げられ、吉田の「のんきさ」がよく表れていると指摘される挿話である。『のんきな患者』という題名の「のんき」の意味合いについては、小林秀雄の発言以来[8]、様々な見解が出されて来たが、この点に関しての私見は後述することとして、ここでは、母親との会話を通じて、吉田が直接目にすることができない外の鳥の様子が生き生きと描写されている点を確認しておきたい。前の二つの話が眺めることの快楽についてのものであるなら、この話は語り合うことの快楽についてのものであると言ってもよかろう。

これら三つの挿話に共通して言えることは、母親ないしは鏡を介するという間接的な形ながらも、吉田が外部に対して意識の回路を開いて行く過程を表している、ということである。すなわち、これら三つの挿話は、吉田が末の弟の見舞いを受け荒物屋の娘の死を知らされる、第四の挿話を導き出すための枕としての物語機能を担わされていると考えられるのである。

さて、その第四の挿話であるが、この少々長い話は次のように語り始められる。

そんな或る日吉田は大阪でラヂオ屋の店を開いてゐる末の弟の見舞をうけた。

その弟のゐる家といふのはその何カ月か前まで吉田や吉田の母や弟やの一緒に住んでゐた家であつた。そしてそれはその五六年も前吉田の父がその学校へ行かない吉田の末の弟に何か手に合つた商売をさせるために、そして自分達もその息子を仕上げながら老後の生活をして行くために買つた小間物店で、吉田の弟はその店の半分を自分の商売にする積りのラヂオ屋に造り変へ、小間物屋の方は吉田の母親が見ながらずつと暮して来たのであつた。それは大阪の市が南へ南へ伸びて行かうとして十何年か前まではまだ草深い田舎であつた土地をどんどん住宅や学校、病院などの地帯にしてしまひ、その間へはまた多くはそこの地元の百姓であつた地主たちの建てた小さな長屋がたく

さん出来て、野原の名残りが年毎にその影を消して行きつつあるといふ風の町なのであつた。吉田の弟の店のあるところはその間でも比較的早くから出来てゐた通筋で両側はそんな町らしい、いろんなものを商ふ店が立ち並んでゐた。

さらにこの後、吉田がこの町を離れ、現在住んでいる田舎へ移るまでの近況が述べられて、ようやく話は本題へ入っていく。一見して分かるように、この説明口調の叙述[9]は、これまでの『のんきな患者』の物語言説とは明らかに異質のものである。物語内容の時間的持続の幅と物語言説のそれとが、ほぼ均等に対応し合っていたこれまでの叙述とは異なり、この箇所は、何年もにわたる物語内容を圧縮＝簡略化した物語言説となっている。G・ジュネット[10]によれば、このような物語言説は要約法と呼ばれるもので、小説の物語言説において二つの情景を結ぶ移行部としての、そしてそれらの情景を際立たせる背景としての機能をもつものである。『のんきな患者』に即して言えば、この引用箇所の前では、「春の夜のやうな心のときめき」に代表されるような生の快楽を求める吉田の姿が描かれていたが、この引用箇所の後、吉田は娘の死を知らされて「便りない変な気持」に陥っており、確かに相異なる二つの情景を連結する機能を認めることができる。また、ここで紹介されている、吉田が以前住んでいた町は、大都市近郊の新開地であって、これ以降展開される様々な話の舞台でもある。この大都市近郊の新開地という土地柄は、地縁や血縁にからめとられた村落ほど隣人との結びつきは強固ではないものの、大都市ほど隣人に対して無関心というわけでもない、微妙な人間関係の網の目が張り巡らされた空間であり、そこに東京という大都会から吉田が移り住んだのである。いわば、この空間は、吉田と様々な話に登場する人々との関係を浮かび上がらせる「地」なのである。

まず最初に登場するのが、肺を患って死んだ荒物屋の娘であるが、「吉田はその店にそんな娘が坐つてゐたことはいくら云はれても思ひ出せなかつた」とあるように、その娘に対する都会帰りの吉田の関心はあまり高いものとは言えない。そんな吉田も、娘の容態が悪くなるに従って娘のことを気に懸けるようになって行くが、それでも、娘が食後に目高を呑んでいるという話を最初に聞いた時には、「まだまだ遠い他人事の気持」でいたのである。それが、「うちの網は何時でも空いてますよつて、お家の病人さんにもちつと取つて来て飲ましてあげはつたらどうです」などと言われるに至って、急に他人事ではなくなり吉田も狼狽する。

吉田は何よりも自分の病気がそんなにも大つぴらに話されるほど人々に知られてゐるのかと思ふと今更のやうに驚ろかないではゐられないのだつたが、しかし考へてみれば勿論それは無理のない話で、今更それに驚ろくといふのはやはり自分が平常自分について虫のいい想像をしてゐるんだといふことを吉田は思ひ知らなければならなかつたのだつた。

ここで確認しておきたいことは、吉田は肺病を病んだ身体によって既に世間と関係付けられており、吉田の意識がそれを追認するかたちになっているということである。つまり、世間から見れば吉田は一人の肺病患者に過ぎないわけだが、彼自身はそんな当たり前の事実に気付いていなかった、というより気付こうとしなかったのである。世間から肺病と見なされた身体に彼が自己同一化しなかったのは、まだ彼の病状がそれほど切羽詰まったものではなかったためと

も思われるが、それ以上に、肺結核＝死に至る病という当時の常識が大きく作用していたことは言うまでもないだろう。

しかし、自分を惨めな肺病患者の一人と認めることによって、初めて同じ境遇にいる他者の心を身を以て理解できるのだとも言えるのである。

吉田はそんなことをみな思ひ出しながら、その娘の死んで行つた淋しい気持などを思ひ遣つてゐるうちに、不知不識の間にすつかり自分の気持が便りない変な気持になつてしまつてゐるのを感じた。吉田は自分が明るい病室のなかにゐ、そこには自分の母親もゐながら、何故か自分だけが深いところへ落ち込んでしまつて、そこへは出て行かれないやうな気持になつてしまつた。

ここで吉田が「便りない変な気持」になったのは、死んで行く娘の淋しい気持ちに共鳴するとともに、自分の「病んだ身体」の行く末を思い知らされたからである。この時吉田は、「病んだ身体」を他者のようによそよそしいものと見なしていたそれまでの自分を、「のんきな患者」と感じたのではないだろうか。この推測は、次の第三章との関連において裏付けることができるはずである。

## 五

先にも触れたが、第三章は第二章における娘の死に触発されての吉田の回想として語り始められる。まず、吉田は多くの肺病患者の死について思いを巡らせ、「それらの人達の病気にかかつて死んで行つたまでの期間は非常に短かかつた」ことに思い当たる。このことによって吉田は、「それらの人達」同様自分にも早晩死が訪れることを痛感せざるを得なかっただろう。しかし、吉田はその絶望的状況の前で無気力には陥らず、むしろ「自分にすすめられた肺病の薬」を通じて世間の人々の肺病に対する奮闘ぶりに思いを馳せて行く。「人間の脳味噌の黒焼の話」と「首縊りの縄の話」は、そのような意識の流れの中で吉田が想起したエピソードであるが、この二つの挿話に見られる吉田の態度には若干の相違が認められる。

前者において吉田は、「自分の弟の脳味噌の黒焼をいつまでも身近に持つてゐて、そしてそれをこの病気で悪い人に会へば呉れてやらうといふ」女に「何かしら堪へ難いもの」を感じ、それを貫って来た母親に対して「取返しのつかないいやなこと」をしたと心の中で責めている。ここで吉田は知識人の立場から、非合理なものに縋ろうとする俗世間の人々を非難し、そのような俗信を受け入れた母親に失望しているのだが、逆から見れば、吉田は現実の生々しさを受容できず、また子を思う母の気持ちに対する理解にも欠けていると言えるのである。だが、後者において吉田は、「さふいふ迷信を信じる人間の無智に馬鹿馬鹿しさを感じ」ると同時に、「それらの人間の感じてゐる肺病に対する手段の絶望と、病人達の何としても自分のよくなりつつあるといふ暗示を得たいといふ二つの事柄」にも気付いている。人間の愚かさと真剣さとが表裏一体であることに、吉田は思い到ったわけである。

この二つの挿話は、吉田の間接体験についてのものであるが、続く二つの挿話――仔鼠の黒焼きの話・入信を勧める女の話――は、吉田の直接体験（しかも、「吉田が肺病患者だといふことを見破つて近付いて来た世間」）に関するものである。この二つの挿話に共通して言えることは、真剣であるが故に滑稽でもある世間の人間模

様の中に、知識人の立場にいたはずの吉田が次第次第に取り込まれて行っていることである。とはいえ、ここでの吉田が世間の人々と全く同じ次元に降り立ったとまでは言い難い。病院の附添婦に対する同情も「観察」によって生じたものだし、入信を勧める女の姿から感じた「自分等の思つてゐるよりは遙かに現実的なそして一生懸命な世の中」という感慨にも、自己と世間との間に一定の距離を置いている態度を看取できる。要するに、この回想部分における吉田は、世間に対して傍観者の位置に止まっていると言える。この回想部分は、それまでの吉田がいかに「のんきな患者」であったかを読者に印象付ける機能を有していると考えられるのである。

そして、繰り返しになるが、これらの挿話の中で述べられた吉田の感慨はあくまで過去の時点でのものであって、荒物屋の娘の死に触発されての「便りない変な気持」から直接発展した認識でもなければ、吉田が最終的に到達した心境でもない。『のんきな患者』における吉田の最終的な感慨は、エピローグの部分に提示されている。

吉田はここで肺結核で死んだ人間の百分率という統計の数字を持ち出しているが、これが読者に唐突な印象を与え、様々な解釈や評価を生み出す母体となってきた。しかし、私は、この統計の数字を通じて吉田が言いたかったことは、特に次の箇所にあると思う。

吉田はこれまでこの統計からは単にさういふやうなことを抽象して、それを自分の経験したさういふことにあてはめて考へてゐたのであるが、荒物屋の娘の死んだことを考へ、また自分のこの何週間かの間うけた苦しみを考へるとき、漠然とまたかういふことを考へないではゐられなかつた。それはその統計のなかの九十何人といふ人間を考へてみれば、そのなかには女もあれば男もあり子供もあれば年寄もゐるにちがひない。そして自分の不如意や病気の苦しみに力強く堪へてゆくことの出来る人間もあれば、そのいづれにも堪へることの出来ない人間も随分多いにちがひない。しかし病気といふものは決して学校の行軍のやうに弱いそれに堪へることの出来ない人間をその行軍から除外してくれるものではなく、最後の死のゴールへ行くまではどんな豪傑でも弱虫でもみんな同列にならばして嫌応なしに引摺つてゆく――といふことであつた。

ここに示された吉田の考えから、次の二つのことが言えると思う。

まず第一に、吉田は自分が受けた身体的な苦しみを媒介として、九十何人という抽象的な数字に還元できない、個々の人々の苦しみを実感しているということである。それまでは、他者のようによそよそしいものと感じていた「病んだ身体」に自己同定する――換言すれば、身体の他者性を受け入れる――ことによって、文字通りの他者を吉田は受け入れられるようになる。ここには、病室から一歩も出られないにも関わらず、そのような「物語空間の枠」を超えたかたちでの他者との連帯の可能性が示されていると解釈できる。

しかし、そのことは同時に、満足な治療も受けられないまま死のゴールへと引摺られていく病人の一人として自分を見なすことをも意味する。「病んだ身体」に自己同定すれば、死によって閉ざされた「時間的な枠」を超えられないことを認めることになる。『のんきな患者』における吉田の最終的な心境は、やはり、第二章末尾で示された「便りない変な気持」なのであり、吉田がこの現実の重さを直視していることを看過してはならない。

最終的に言えることは、吉田が、「病んだ身体」を拒否して現実

を超えたある種の永遠に回帰することよりも、「病んだ身体」を現実として受け入れることの方を選択したのだ、ということである。これは、死を直前に控えた者が迫られるギリギリの選択であって、余人が軽々しく口を差し挟む領域の問題ではないと思われる。重要なのは、『のんきな患者』という作品が、このような吉田の最終的な選択を読者に示し得るように、構造化されているかどうかということであろう。その点に関しては、これまでの作品分析がそれを証明している。『のんきな患者』は、主人公が「病んだ身体」を介して「他者」との連帯の可能性を見出していく物語として、確かに読むことができるのである。

## 六

最後に、留保していた作家論的な視座からの検討を『のんきな患者』に加えることによって、『のんきな患者』とそれ以前の梶井文学との相違点に言及しておきたい。ただ、作家論的な検討といっても、ここで問題にする作家が、様々な伝記的事実を担う生身の《作者》を意味するのではなく、あくまで小説という言語芸術を創出する母体としての《作家》を意味するものであることは、断っておかねばならない。また、『のんきな患者』とそれ以前の梶井文学との相違点といっても、ただ変化した点だけを追究するのではなく、『のんきな患者』において変化しなかった側面（正確には、変化が徹底しなかった側面）についても言及すべきであろう。

さて、この問題は多角的な視点から追究できるであろうが、本論では、『のんきな患者』の作品構造を解明する際のキーワードの一つでもあった「身体」に着目して、考察を進めたい。『のんきな患者』以前の作品において、作家・梶井は「身体」をどのように描いて来たのか。次に典型的な例を掲げて検討してみよう。

> 此処でも町は、窓辺から見る風景のやうに、歩いてゐる彼に展けてゆくのであつた。
>
> 生れてから未だ一度も踏まなかつた道。そして同時に、実に親しい思ひを起させる道。――それはもう彼が限られた回数通り過ぎたことのある何時もの道ではなかつた。何時の頃から歩いてゐるのか、喬は自分がとことはの過ぎてゆく者であるのを今は感じた。
>
> そんな時朝鮮の鈴は、喬の心を顫はせて鳴つた。或る時は、喬の現身は道の上に失はれ鈴の音だけが町を過るかと思はれた。また或る時それは腰のあたりに湧き出して、彼の身体の内部へ流れ入る澄み透つた渓流のやうに思へた。それは身体を流れめぐつて、病気に汚れた彼の血を、洗ひ清めて呉れるのだ。

これは、『ある心の風景』（大正十五年八月）からの引用である。主人公・喬は、性病と肺病という違いこそあれ、『のんきな患者』の吉田と同様「病んだ身体」に悩まされているが、「病んだ身体」を特殊な感覚体験の中で無化することによる現実浄化を求めている点で、「病んだ身体」を受け入れた吉田とは異なる。ここでの喬は、現実世界に関係付けられている身体の無化を通じて、現実世界の時空を超えた「永遠」へと精神を回帰させているのである。つまり、『ある心の風景』という作品は、日常的な時空間とそれを超えた「永遠」とでもいうべき時空との間を、垂直移動する言語のダイナミズムを軸として形成されていると言えよう。詳細な検証は、また稿を改めてということになろうが、これは、『のんきな患者』以前

の梶井文学に共通していえる特徴でもある。それに対して『のんきな患者』は、前節でも述べたように、日常的な時空間を超えた「永遠」を志向することなく、日常の中を水平移動する言語の運動を軸に構成されている。『のんきな患者』において作家・梶井が試みた文学的転換とは、非常に大ざっぱな言い方をすれば、小説を形成する言語の運動を垂直方向から水平方向へと転換することにあったのではないかと思われる。

このような『のんきな患者』における日常的な時空間の重視に対して、樫原氏[5]は私小説への方法的回帰であるとの批判を下しているが、小説の素材として日常を重視することが私小説的というマイナス評価[11]に直結するとは、私には思われない。作者の日常を作品の素材としても、作者を連想させる主人公を相対化する言語のダイナミズムが作品内に機能していれば、私小説とはまた別の小説たり得ると私は考えるのである。

だが、『のんきな患者』が、こうした言語のダイナミズムを有する作品として充分に立体化されているかと問えば、残念ながら否と答えざるを得ない。作品分析を通して述べて来たように、冒頭部分での吉田を相対化する語りが作品全体を通じて徹底されなかったことが、『のんきな患者』の作品世界を今ひとつ平板なものにしてしまっている。樫原氏の批判も、素材の問題ではなく語りの問題としてなら、ある程度納得できるのである。

とはいえ、冒頭部分でわずかでも試みられたことをすべて無に帰することも、またできるものではない。梶井基次郎は、『のんきな患者』で方法的な模索に着手し、その中途で逝った。後の世の論者としては、残された作品を精密に読み込むことによって、その可能性と問題点とをできる限り正確に浮かび上がらせるしかないのである。

〔注〕

(1) 昭和六年五月十九日付・辻野久憲宛書簡

(2) 昭和七年二月五日付・中谷孝雄宛書簡

(3) 「のんきな患者」論（『琉球大学文理学部紀要』十一号・昭和四十二年三月）

(4) 『鑑賞日本現代文学⑰　梶井基次郎・中島敦』（角川書店・昭和五十七年一月）

(5) 「梶井基次郎の位置――『のんきな患者』を中心に――」（『国語国文学論集』第十一号・昭和五十七年三月）

(6) この「説話論」という表現は、昭和五年三月二十二日付・北川冬彦宛書簡の中で、梶井自らが用いている言葉である。

僕は君が小説を書くのは大賛成だ　君の意力はきつと小説といふ形式に　書き甲斐　働き甲斐を見出すだらうと思ふ　僕の一つ思ふことは　小説はなにしろ説話が元だから　描写――しかも非常に切迫した形式のそれをやつて来た君が　若しその描写でやつて行かうとすれば非常に苦しい仕事をしなければならないかと思ふ　これは僕自身がそんな気がするので　君もさうではないかと思ふのだ、なにしろ説話といふ奴をうまく使はなければ楽でないし　小説の「スワリ」も出ないやうに思ふ

君が五枚十枚二十枚の散文詩風のものから書いてゆかうといふことは　それ自身として非常にいい試みとは思ふが　それとは別に　この説話論をうけ入れてくれることを願ふ

(7) 『〈身〉の構造――身体論を超えて――』（青土社・昭和五十九年十一月）

(8) 「梶井基次郎と嘉村礒多」（『中央公論・昭和七年二月）

(9) 羽鳥徹哉氏は、「のんきな患者――事実認定の作品――」（『国文学』昭和四十九年六月）の中で、この作品は「弟のことを書いたあたりに無駄があ」るとしている。確かに、このような説明口調の叙述の乱用は小説として好ましいとは言えないし、またもっと上手い表現の仕方もあり得るだろうが、小説という言語空間を多様な位相の言葉が織りなすテクストと見るとき、原則的に小説内に無駄な部分などないと言えるのではないだろうか。

(10) 『物語のディスクール――方法論の試み――』（花輪光・和泉涼一訳、書肆風の薔薇・昭和六十年九月）

(11) また、私小説＝社会的な視野を欠く方法的にも未熟なジャンル、という制度化された文学史上の「常識」も、そろそろ再検討されてよいのではないだろうか。

附記

本稿は、平成元年度広島大学国語国文学会春季研究集会における発表に補訂を加えたものである。席上で御助言を賜った、米谷巌先生・藤本千鶴子先生・遠藤伸治氏に厚く御礼申しあげます。

なお、梶井基次郎の作品等の引用は、筑摩書房版『梶井基次郎全集』に拠った。引用する際に、新字体のある旧漢字は新字体に改めた。

――広島大学文学部助手――